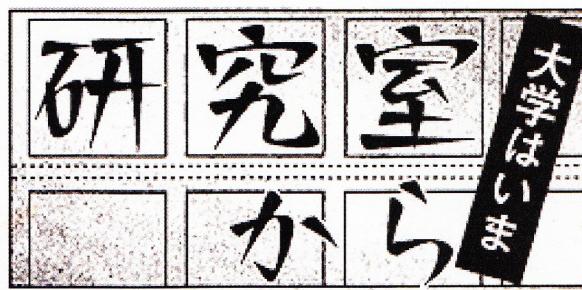


岐阜大応用生物科学部 植物分子生理学研究室 山本 義治教授



光合成に付随して発生する有害なラジカルへの不足などの環境ストレスに対しても植物は、DNA上にある遺伝子の対処、糖や脂質の代謝、アミノ酸合成、ビタミンの種子生産を行うべく生存率を高めようとしています。この過程で、植物は環境変化に対する適応能力を発揮します。

環境の変化に適応する植物

タミン類やアントシアニンなどの2次代謝、

光合成を行う植物においては、葉や根の形状など実際に見られる生理現象が、日光は「食料」ですから、光環境は植物の生存と成長にとって大変重要です。また、暑さや寒さ、乾燥や冠水、土壤栄養など、植物の構成や

対応しています。タミン類やアントシアニンなどの2次代謝、葉や根の形状など実際に見られる生理現象が、日光は「食料」ですから、光環境は植物の生存と成長にとって大変重要です。また、暑さや寒さ、乾燥や冠水、土壤栄養など、植物の構成や

伝子の一つ一つの働きがこの調節領域のところです。私たちの研究室では環境変化に対する調節していくところにあります。

植物遺伝子の挙動を観察し、対応する調節領域の塩基配列をコンピューターを用いて統計解析することで、調節領域に含まれている情報の解読を進めています。

このように、植物の環境適応能力は、悪い環境から「逃げる」ことです。それぞれの遺伝子の仕組みを解明することができると比べるは固有の調節領域を持つところは、多くの動物と比べてはるかに高度に発達っています。

ところが、植物は、その肝は今、植物ゲノム情報を開発することが可能になります。